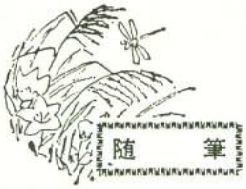

ヘンリー・ダイエル『技術者の教育』(5)

梅溪　昇*・山中　泰**

（前号のつづき）

もちろんこうしたことはどの科目についてもある程度いえることですが，とくに数学においては顕著であります，グラスゴー大学(Glasgow University）のケーイルド学長（Principal Caird）はそのことについて次のようにうまく表現しています．

「いわゆる論証的あるいは推論的科学へ熱中することによって，非常に考えが狭くなり，論理的な鋭さがうすくなり，理屈っぽい浅薄さに走る人間がいる．物事の最も抽象的関係を取扱う，最もきびしい推論的活動を要する科学は，ある種の人間にとっては非常に必要な知的訓練を与えるが，誰にでも価値があるとはいえない．訓練が度を越してかえって害を生じ，あるいは別の科目から得られる必要なつりあいや補足なしに訓練が行われることは不幸なことである．論理は良き僕（しもべ）である，がしかしまた悪い主人でもある（Logic is a good servant but a bad master). そこに人びとが数学者の犠牲になる可能性がある．例えば，一つの危険性は，確定的な証拠のないような種類の学問をきらい，見下すことである．絶対的な確実性が作用する研究に慣れている人間は，学術用語に曖昧さがなく，論証過程の各段階は絶対的な必然性の連続であり，結論は絶対に誤りなく確かであるところから，ややもすれば同じような確実性を他のすべての学問にも要求し，こうした確実性が得られないような研究を軽蔑したり，もしくはじれったく思うようになる．」と．私は諸君がすでに勉強している学問をおろそかにすることなく，また余暇の大部分を諸君の仕事に直接適用されない学問に費すよう勧めます．そういうものの中で，博物学（Natural History）ほど興味のあるものはありません．私が博物学というのは普通いわれるところの狭い意味のものではなく，自然の歴史，あるいは自然の事物すべてに関する学問であります．もし諸君が地質学の原理を理解し，また植物や動物を正しく分類収集することが出来るか，もしくはその手伝いができれば，田舎への散策がもっともっと興味あるものとなるでしょう．こうして諸君は，見るものがすぐわかり，その類似や相違を識別することによって自分の観察力——この重要性についてはすでに私が諸君に説いたところですが——を増進させる機会をもつことになるでしょう．諸君が諸観察を結びつけるために仮説（hypothese）を探る習慣は，思考力を強め，また他方後になってそのような仮説が事実によって誤りと立証された場合に，それを捨て去ることが必要であり，それは，人生におけるいかなる出来事にも役立つ資質である忍耐，正確さ，真実愛を養うものであります．

博物学のすべての分類の中で，諸君自身の肉体的構造を取扱うものほど面白く，重要なものはありません．生理学（pysiology）の原理についての知識は，精神的および肉体的に，——そして私はまた道徳的にということを附け加えよう——諸君の健康を維持し，改善する手引になります．チャーズル・キングスレイ（Charles Kingsley）は，「血液を浄化しない不健康な肺から年々，病気だけでなく，不品行・短気・怠惰・不節制・狂気，そして正直にいって犯罪が起こる．その統計は，人の良し悪しにかかわらず，神に召されてその肉体の中でなされたすべての行為が裁かれるまでは知ることができない．」と云っています．

*梅溪　昇（Noboru UMETANI），大阪大学文学部，大阪大学教授，文学博士，日本近代史
**山中　泰（Tai YAMANAKA），アメリカ合衆国，エモリー大学卒（ギリシア古典学部），大阪大学文学部研究生

さらに自国および外国の文学は．諸君の余暇のかなりの時間をしめるべきです．しかしながら，印刷されたものすべてが文学という名にふさわしいと考えてはいけません．例えば，新聞や雑誌は普通文学の中に含まれていません．それらは文明の向上を助ける重要なものでありますが，概して情報をやさしく魅惑的な文体で伝え，そのためもっと難解な性質の勉強を妨げるので，それらに余り多くの時間を費すと知性に悪い影響を及ぼすことは否まめません．本当に良い記事にぶつかった場合は，注意深く読み，主な点をノートしなさい．しかし，記憶できないと思われるものまで記憶しようとすると，かえって記憶力を弱める結果になり，その記憶を役立たせることができなくなり，更には，多くの人びとは，新聞の意見を受け売りし，自分自身で考える労をはぶくようになります．

とくに日本では，どんな階級の人びとでも，大抵印刷された記事や主義を正しいものと受け取る習慣が広範囲に存在しているようであります．日本の新聞の急速な勃興とその発達は，時代の驚異の一つと考えられてもよいけれども，記事を書く人びとの多くが，まさに書く姿勢があるかどうかきわめて疑わしく，その結果多くの間違いがあります．

作家の大多数は，科学に関する書物は，思想や空想の表現であるよりも，むしろ事実の表現を含んでいるということを理由に文学として分類できないと云います．私はこのような分類が正しいとは思いませんが．今はその議論はさておき，科学文学と区別される一般文学についての諸君の注意を促したいのです．

諸君は，読書の大きな目的は知的エネルギーを刺激することであるということを考えるべきです．偉大な雄弁家の演説，伝道者の説教，詩人の詩，偉人の伝記を読んで感動し，知的能力を奮起せずにはいられないものであります．偉大な作家の作品には，その最高の思考が保存され，宝として貯えられ，それらを通してわれわれは，過去の知的および精神生活の継承者になることができます．ある有名な作家は，次のように云っています．「すぐれた知性をあらわした作品に接しながら興奮せず，動かされず，自分も何か出来ると感じることなく，また何かしようとも思わない人は，まだ学生としての最高の喜びを味っている人ではなく，人生において自分のまわりにどんなに多くの歓喜の河が流れているかまだわからない人である．」と．

このことについて作家は，しばしば読書の主な目的は，情報を蓄え，文体を洗練することにあると云います．これらのことは大切なことですが，知的エネルギーを刺激することに対しては，第二次的なものと考えるべきです．専門教育について話したと同様，ある人は情報を沢山もっていて，それがかえって重荷になっているかも知れませんが，もし文体の上達を主な目的にしたならば，それはたいてい自分の一番気に入った作家の文体の盲従的な模倣に終ってしまうでしょう．是非とも自分の思想を順序正しく，簡潔に，そして優雅に紙の上に表現してみなさい．しかも諸君が書こうと思う主題について明確な考えをもっていれば，その文体は多分欠点が多くないものになると考えなさい．

ゲーテ（Goethe）がドイツ人学生に語ったように，

「正当な利益を求めることこそ君たちの旨とすべきで，浅薄な大言壮語の愚物であってはならない．しっかりした思慮分別は言わずと明らかで，あえて批評家の差しがねはいらない．君たちの胸に君たちの舌が忠実でさえあれば，どうして仰々しく言葉を漁る必要があろうか．」

書物の選択とその利用の仕方については多くの事が云えます．種々異った科目に関して，疑問もミスもない優良書のリストを入手することは容易で，そうすることによって諸君は，ここ数年間に刊行された優良書の殆んどすべてに注意を払うのに好都合で，新しく出版されるものと比較する一つの目安とすることができます．そういう優良本のリストを利用するのが，読む価値がない本だと知るのに多くの時間を浪費するより，ずっと賢明です．諸君は，それらが含んでいる情報のためにも，また別に同時代の文学に諸君自身なじむためにも，若干の新刊書を読む必要があります．しかし私は，諸君がそれを読み過ぎるよりも，むしろ読み足りない方がましだと思います．

トッド博士（Dr. Todd）は，自分の学生への手引きの中で，本を読み始める時の指示を次のように与えています．

「必ず料理を良く見て，試食してから食べなさい．読み出す前に，タイトル・ページを調べ，誰がこの本を書き，著者はどこに住んでいるか．諸君は著者について何か知っているか．どこで，また誰によって出版されたのか．この出版社から出版されている本の一般的性格について知っているか．この本について聞き知っていることを思い出して見なさい．それから序文を読み，著者がどんな挨拶をし，自分および自分の仕事についてどう考えているか．何故に自分の意見を大胆に公開するのか．さらに目次を見て，著者の主題の分け方がどんなであるかを眺め，その全体の輪郭をつかむ．それから一章あるいは一節を取り上げ，著者がどのように区分けをし，かつ充実させているかをみなさい．

ここでもし，内容に立入って調べる前に，この本を味わいたいと思えば，重要な点が論じられている箇所や大切な思想が詳述され，あるいは説明されている箇所について，どのようになされているかを知りなさい．もし二，三カ所でこういうことをためしてみて，その著者が曖昧で，つまらない空論者であり，浅薄なことが判れば，もうそれ以上探ってみる必要はありません．ここでは価値あるものをみつけることがむつかしく，利用するに値しないでしょう．しかしながら，もしその著者が値打ちがあり，注目するに値すると考えるならば，再び目次にもどりなさい．それから一章ずつ調べていきなさい．そして，次に本を閉じて全体の輪郭がはっきりと頭の中につかめたかどうかを確かめなさい．これが出来るまで先へ進んではいけません．」

さて自国および外国の歴史（History）の勉強も注目されなければなりません．歴史はその道徳的欠点抜きの各時代の経験を利用することができることによって，ある程度まで人生の短かさをつぐなって呉れます．不幸にして歴史の本はしばしば王室の陰謀や，内乱や外国との戦争の単なる記録であり，もっとはるかに重要な主題を，全くおろそかにしている場合が多いのです．歴史家の真の本分は，その国の偉大な国家的行為を記録するばかりでなく，国民生活の進歩（the progress of national lite）を記録することであります．君主や支配者の個人的行為よりも憲法の歴史，法の改良，科学の発達，学問のうつりかわり，知的世界の革命の方がはるかに重要であります．私の知っている本の中では，グリーン氏の『英国民の歴史』（Mr. Green's History of the English People）が，私の述べた基準に最も近いものだと思います．彼はその序文の中で，こう述べています．「この著作の目的は，表題によって明白である．それは英国王や，英国の征服の歴史ではなく，英国民の歴史である．歴史家によってしばしば書かれ，英国民に馴染み深い，それ自体おもしろく魅力のある多くのものを犠牲にする覚悟で，私は外国との戦争や外交，王や貴族の個人的冒険，王室の壮観，お気に入りの陰謀の詳細はあっさりと簡単に取扱い，国家自体の歴史である憲法上の，知的な，そして社会的な進歩について詳しく述べたいと思う．こういう目的のために，私はクレシー（Cressy）よりチョーサー（Chaucer），ヨーク党（Yorkist）およびランカスター王家（Laneastridn）のつまらない争よりカクストン（Caxton）に，エリザベスのカデイス（Cadiz）における勝利よりエリザベスの救貧法（Poor Law）に，チャールズ，エドワード（the Young Pretender）の逃亡よりメソヂスト復興（Metho dist revial）の方により多くの紙面をあてた．

この著作の真の価値がどのようなものであろうと，私は終始<太鼓とラッパの歴史（„drum and trumpet history"）>にならぬよう努力した．歴史家は，しばしば自国の歴史を単なる同胞の殺しあいの記録にしてしまうと非難されている．しかしヨーロッパ諸国の本当の歴史では，戦争はほんのわずかの部分しか占めず，英国においてはなおさらである．英国社会と英国政府に深い影響を及ぼした唯一の戦争は，フランスとの百年戦争であり，その結果はまさに不幸なものであった．クレシーの栄光について，私が少ししか触れていないとすれば，それはボール（Ball）の説教やラングランド（Langland）に詩を書かしめたところの貧困や，不幸について長々と書いたからである．しかしながら他方において，私は平和の大業績（thetriumphs of peace）について詳しく述べることをためらったことはない．

（次号へつづく）